

一般社団法人 日本土壤肥料学会
2023 年度事業報告、事業報告の附属明細書、収支決算報告

I. 2023（令和 5）年度事業報告（令和 5 年 3 月 1 日～令和 6 年 2 月 29 日）

2023 年度は新型コロナウイルス感染症による行動制限の緩和が進み、年次大会、支部大会、講演会はすべて対面またはオンライン併用のハイブリッド形式で開催され、若手会員の海外渡航等支援を活用した国際会議での発表も活発に行われた。年度末の会員数は前年度に比べやや増えた。会誌、欧文誌では、講座や特集セクションが拡充された一方、原著論文投稿数の減少が続いた。また、これまで培われ取組んできた事業に加え、2027 年の学会創立 100 周年が活性化を進める契機となるよう、併せて将来を担う若手会員の裾野を広げる取組みを検討し、その一助とするため寄付金募集を開始した。

1. 定期刊行物および資料の刊行

1) 定期刊行物

- (1) 日本土壤肥料学雑誌（会誌）は、第 94 巻第 2 号～第 6 号および第 95 巻第 1 号の計 6 冊を刊行した。掲載した論文数は次の通りである。報文 13 編、ノート 6 編、技術レポート 5 編、講座 28 編、資料・国内外情報等 20 編、ニュース、書評、欧文誌掲載論文要旨、合計 470 頁、ほかに学会賞等業績要旨、会員消息、会誌投稿規程、原稿執筆規程、編集委員会だより、学会だより（土壤教育活動だよりを含む）等を掲載した。
- (2) Soil Science and Plant Nutrition（欧文誌）の刊行は Vol.69, No.2～No.6（No.5、6 合併号）および Vol.70, No.1 の計 5 冊となり、掲載した論文数は、通常論文 29 編、特集セクション 5 編、会誌掲載論文要旨、合計 360 頁である。
- (3) 日本土壤肥料学会講演要旨集（第 69 集、257 頁）を 2023 年度愛媛大会（9/12～14）に際し、電子媒体として刊行した。

2) その他の刊行物

2021 年に Springer 社から刊行された"The Soils of Japan"の日本語版を、朝倉書店から「日本の土壤事典」（日本土壤肥料学会・日本ペドロロジー学会（監修）／波多野隆介・真常仁志・高田裕介（編））として 9 月に刊行した。

2. 講演会および研究会等の開催、支援

1) 「土と肥料」の講演会

2023 年 5 月 20 日（土）、総会終了後に、東京大学山上会館大会議室において「土と肥料」の講演会を開催し、54 名の参加があった。また、会員限定対象のオンライン参加の試行に 30 名が参加した。テーマを「肥料高騰における施肥管理の効率化—土壤肥料からのアプローチ」とし、講演者と演題は、鮎澤純子氏（長野県農政部農業技術課 専門技術員）「イネ科緑肥作物の肥効活用によるレタスの減肥技術の開発」、久保寺秀夫氏（農研機構 農業環境研究部門 土壤環境管理研究領域長）「水田土壤のカリ収支を踏まえた水稻のカリ適正施用指針」であった。なお、本講演会は日本学術会議の後援を得て実施した。

2) 学会創立 100 周年事業公開シンポジウム

国際基礎科学年公開シンポジウム「食・土・肥料—持続可能な発展のための基礎科学として」を、本学会と日本学術会議農学委員会土壤科学分科会、農学委員会・食料科学委員会合

同 IUSS 分科会との共催、および IUSS 分科会構成学会である 17 学会の後援の下、2023 年 7 月 29 日（土）に東京農業大学世田谷キャンパス百周年記念講堂と Zoom ウェビナー配信のハイブリッド形式で開催した。事前の登録者数は会場参加が 200 名以上、ウェブ参加がおよそ 500 名で、参加申込み者は 20 歳代が 15%、30 歳代が 14%、40 歳代が 20%、および 50 歳代が 25%と、現役世代を中心に幅広い年齢層から申し込みがあった。また、Zoom ウェビナー参加者数は 204 名（最大接続数）でのべ参加者数は 468 名であった。開催後のアンケートでは、本シンポジウムを「大変有意義だった」との回答が 78%と大好評であった他、ハイブリッドでの開催形式に感謝を述べた意見をいただいた。

なお、本シンポジウムは、学会創立 100 周年事業の一環として開催した。

3) 2023 年度年次大会

- (1) 2023 年度愛媛大会は、9 月 12 日（火）～14 日（木）に愛媛大学城北キャンパスにおいて開催した。参加者数は事前登録 719 名（正会員 456 名、学生会員 187 名、非会員 76 名）および当日登録 76 名（正会員 30 名、学生会員 10 名、非会員 36 名）であった。
- (2) 一般講演の演題登録数は 449 題（口頭発表 288 題、ポスター発表 161 題）で、発表取り下げが 1 題（ポスター発表 1 題）あった。口頭発表は対面形式で行い、ポスター発表は 9 月 7 日～18 日の間 LINC Biz を利用したオンライン形式で行った。一般講演演題から若手口頭発表優秀賞 15 題、若手ポスター発表優秀賞 10 題を選考し、表彰した。
- (3) シンポジウムは公開を含めて 5 つのテーマのシンポジウムを対面とオンラインのハイブリッド形式で開催した（9/14）。シンポジウムのテーマは、従来と同じく会員から公募し、これを基に部門長会議で検討して設定した。シンポジウムテーマと関連部門は以下の通り。
 - ・ 2、3、6 部門：水田土壌の鉄の酸化還元研究の現在
 - ・ 3、6、7、8 部門：有機物を活用したネイチャーポジティブな柑橘栽培を目指して（公開シンポジウム）
 - ・ 2、6、7、8 部門：水田に蓄積する土壌有機物—その特徴と動態
 - ・ 1、6、7、8 部門：有機稲作栽培の拡大に向けて土壌肥料学からニューアプローチ
 - ・ 1、6、8、9 部門：人、動植物、環境の健康を基本とする食料システムの生産性向上と環境負荷低減を考える
- (4) 高校生による研究発表会は、約 20 名の高校生による 12 題（10 校）の対面形式での発表があり、最優秀ポスター賞 1 題および優秀ポスター賞 2 題を表彰した（9/13）。なお、発表会参加の 8 校へ交通費補助を行った。また、LINC Biz を利用したオンラインポスター発表 18 題（10 校）が行われ（9/7～18）、最優秀オンラインポスター賞 1 題、優秀オンラインポスター賞 2 題を表彰した
- (5) 学会賞等授賞式では、第 68 回日本土壌肥料学会賞 3 名、第 28 回同技術賞 2 名、第 41 回同奨励賞 5 名、第 12 回同技術奨励賞 1 名、第 12 回同貢献賞 1 名、日本土壌肥料学雑誌論文賞 1 件、SSPN Award 2 件に各賞を授与した。各賞の受賞者および受賞業績は以下の通り。

第 68 回日本土壌肥料学会賞受賞者と受賞業績

- ・ 秋山博子：農耕地における温室効果ガス発生削減に関する研究
- ・ 唐澤敏彦：緑肥の総合的土壌改善機能の評価とその利用に関する研究
- ・ 山口紀子：土壌中元素の分子スケールスペシエーション

第 28 回日本土壌肥料学会技術賞受賞者と受賞業績

- ・ 大森誉紀：西南暖地における環境調和型施肥・土壌管理技術の開発と普及
- ・ 中辻敏朗：農耕地の生産環境評価のための手法開発とその活用

第 41 回日本土壌肥料学会奨励賞受賞者と受賞業績

- ・安藤 薫：最新技術を取り入れた土壌養分可給性の評価に基づく持続的肥培管理法の提案
- ・黄 勝：イネのミネラル輸送体の機能解明
- ・時澤睦朋：高精度転写制御配列予測による STOP1 が制御するアルミニウム耐性遺伝子発現に関する研究
- ・増田曜子：水田土壌における窒素および炭素循環を駆動する新規微生物群の発見と応用
- ・森下瑞貴：土壌の空間評価・生成分類に関するデータ集約型研究

第 12 回日本土壌肥料学会技術奨励賞受賞者と受賞業績

- ・八木哲生：北海道における飼料用トウモロコシの省資源・環境保全的施肥法に関する研究
- #### 第 12 回日本土壌肥料学会貢献賞受賞者と受賞業績
- ・安西徹郎：部門・部会制度の創設、技術賞・技術奨励賞の新設等に関与し学会の活性化と発展に貢献

日本土壌肥料学雑誌論文賞受賞者と受賞論文題目

- ・糟谷真宏、安藤 薫、尾賀俊哉、大橋祥範、久野智香子：愛知県での 95 年間の長期連用試験における水稻の収量と土壌化学性の変化および土壌カリウム供給機構について 日本土壌肥料学雑誌 第 93 巻第 1 号 1～11 (2022)

SSPN Award 受賞者と受賞論文題目

- ・Hinako Sugiura, Soh Sugihara, Takehiro Kamiya, Maria Daniela Artigas Ramirez, Minori Miyatake, Toru Fujiwara, Ohyama Takuji, Takashi Motobayashi, Tadashi Yokoyama, Sonoko Dorothea Bellingrath-Kimura, Naoko Ohkama-Ohtsu : Sulfur application enhances secretion of organic acids by soybean roots and solubilization of phosphorus in rhizosphere *Soil Sci. Plant Nutr.*, 67(4), 400-407 (2021)
- ・Atsushi Hayakawa, Yasunari Shiraiwa, Naoki Murakami, Yuki Murayama, Tomoko Ishida, Yuichi Ishikawa, Tadashi Takahashi : Influence of surface geology on phosphorus export in coastal forested headwater catchments in Akita, Japan *Soil Sci. Plant Nutr.*, 67(3), 332-346 (2021)

- (6) 学会賞等授賞式に引き続き、第 68 回日本土壌肥料学会賞 3 名、第 28 回同技術賞 2 名、第 41 回同奨励賞 5 名、第 12 回同技術奨励賞 1 名の受賞記念講演および IUSS 会長のビデオ特別講演を行った。また、論文賞 1 件および SSPN Award 2 件の受賞者については、受賞記念ポスターを大会会場に展示した。
- (7) 受賞記念講演および特別講演に引き続き、懇親会を開催し、352 名の参加があった。
- (8) 大会期間中に会誌編集委員会、欧文誌編集委員会、支部長連絡会、土壌教育委員会を開催した。
- (9) 大会協賛企業、愛媛大学農学部の後援、学会賛助会員への謝意および大会参加証明撮影用ボードを会場に設置するとともに、賛助会員所属者の大会参加無料招待を行った。
- (10) エクスカーション (9/15) では、愛媛県みかん研究所、ふじブドウ園、国営農場見学などを行い、20 名が参加した。
- (11) 会員有志による「土壌肥料若手の会 2023 in 愛媛」(9/15～17) が開催され、愛媛県のみかん研究所、大洲市国立青少年交流の家、内子街並み見学 (木蠟資料館、内子座 等)、愛媛大学農学部附属農場、松山市野外活動センター、愛媛県農林水産研究所、みきゃんパークを訪問するとともに、開催期間を通じて参加者同士の親睦を深める催しや自己紹介を兼ねた研究紹介発表会を行った。全国 10 大学、農研機構、公設試験機関等から 28 名の参加があり、その詳細は、会誌 94 巻 6 号に掲載した。

4) 支部大会

- ・北海道支部：2023年度秋季支部大会を対面開催し（12/8、かでの2・7、札幌市）、98名が参加した。研究発表会では29題のポスター発表が行われ、優秀発表賞を2課題に授与した。同日午後にはシンポジウム「土壌の物理性と炭素動態」を開催し、参加者は109名であった。
- ・東北支部：2023年度東北支部大会（7/19、アイーナいわて県民情報交流センター、盛岡市）、および支部大会公開シンポジウム（7/20、同会場）を対面開催した。支部大会の一般講演は口頭発表8題、ポスター発表11題で49名が参加した。公開シンポジウムは「下水道資源の肥料への応用-地域内の肥料資源のリサイクルシステムの構築に向けて」をテーマに3講演が行われ、参加者は80名であった。
- ・関東支部：2023年度支部大会を対面開催し（11/25、東京農業大学、東京都）、ポスター発表による一般講演36題が行われ、参加者は114名であった。シンポジウム「下水汚泥資源の肥料利用」をテーマに2講演が行われた。また、8機関による情報共有セッションが行われた。
- ・中部支部：2023年度支部大会（第103回例会）を対面開催し（11/13～14、ホテルグリーンパーク津、津市）、特別講演2題、一般講演20題（口頭発表6題、ポスター発表14題）が行われ、参加者は60名であった。
- ・関西支部：2023年度支部大会（12/7、神戸大学瀧川記念学術交流会館大会議室、神戸市）を対面開催した。一般講演の口頭発表30題が行われ、優秀発表賞4題を表彰し、68名の参加があった。また、馬建鋒氏の紫綬褒章受賞講演「作物のミネラル輸送機構」を行い、参加者は68名であった。
- ・九州支部：2023年度支部例会（12/14～15、九州大学西新プラザ、福岡市）を対面開催し、口頭発表による一般講演24題、支部学術賞受賞講演2題が行われ、参加者は60名であった。

3. 研究の奨励および研究業績の表彰

2023年10月27日に選考委員会を開催し、2024年度日本農学賞の推薦候補者、第69回日本土壌肥料学会賞、第29回同技術賞、第42回同奨励賞、第13回同技術奨励賞、日本土壌肥料学雑誌論文賞およびSSPN Awardの受賞者を審査し選定した。選考結果は理事会承認を経て確定した。各賞の受賞者および受賞業績は以下の通り。

第69回日本土壌肥料学会賞受賞者と受賞業績

- ・江口定夫：人-土壌-環境の相互作用下の窒素等物質循環の定量化とモデル化
- ・高野順平：栄養輸送体による栄養感知と細胞内局在制御の解明
- ・矢内純太：土壌肥沃度の時空間変動の解析と持続的農業への応用

第29回日本土壌肥料学会技術賞受賞者と受賞業績

- ・篠原 信：有機質肥料活用型養液栽培および土壌創製技術の開発
- ・西村誠一：多様な農地管理における温室効果ガスの発生実態の解明と排出削減技術に関する研究

第42回日本土壌肥料学会奨励賞受賞者と受賞業績

- ・アシルオグルムハンメット ラシット：水田土壌における原生生物の生態と機能に関する研究
- ・菅波真央：イネの光合成改良に向けたRubiscoとRubisco活性化酵素に関する研究
- ・反田直之：栄養輸送や応答の数理モデル研究
- ・永野博彦：多様な研究手法を用いた陸域生態系における温室効果ガス動態の解明

- ・吉成 晃：植物のホウ酸輸送体の細胞内輸送機構の研究

第13回日本土壌肥料学会技術奨励賞受賞者と受賞業績

- ・中村嘉孝：有機質資材の長期的影響をふまえた砂質畑における施用基準の策定

日本土壌肥料学雑誌論文賞受賞者と受賞論文題目

- ・安藤 薫、糟谷真宏、中尾 淳、中島聡美、村野宏達、中村嘉孝、瀧 勝俊、矢内純太：愛知県露地野菜畑土壌における非交換態カリウム含量の規定要因および作物カリウム吸収への寄与 日本土壌肥料学雑誌 第94巻第3号 163~169 (2023)
- ・平野七恵、江口定夫、織田健次郎、松本成夫：物流データに基づく日本の食飼料供給システム及び畜産業セクターにおける過去40年間の窒素フローと窒素利用効率の解析 日本土壌肥料学雑誌 第94巻第1号 11~26 (2023)

SSPN Award 受賞者と受賞論文題目

- ・Ayane Kan, Hayato Maruyama, Nao Aoyama, Jun Wasaki, Yoshiko Tateishi, Toshihiro Watanabe, Takuro Shinano: Relationship between soil phosphorus dynamics and low-phosphorus responses at specific root locations of white lupine *Soil Sci. Plant Nutr.*, 68(5-6), 526-535 (2022)

4. 内外の研究者、技術者、他学会等との連絡および協力

1) 日本農学会関係

- ・2023年度日本農学会シンポジウム「激動する社会と農学」の開催に協力し、本学会より林健太郎会員（人間文化研究機構 総合地球環境学研究所）が「持続可能な環境と食料安全保障を両立させる窒素利用の在り方」を講演した（10/7）。
- ・2024年度日本農学会シンポジウムのテーマおよび話題提供の募集に対応した。
- ・2024・2025年度日本農学会副会長に本学会推薦の小崎隆元会長（愛知大学国際コミュニケーション学部）が就任することとなった。

2) 日本学術会議関係

- ・日本学術会議が主催する講演会、研究会の開催案内等を学会ホームページ（HP）、フェイスブック（FB）に掲載して会員へ情報提供した。
- ・「持続可能な発展のための国際基礎科学年（IYBSSD2022）」および2027年の日本土壌肥料学会の創立100周年事業の一環として日本学術会議農学委員会土壌科学分科会、農学委員会・食料科学委員会合同IUSS分科会との共同主催「食・土・肥料-SDGs達成のための基礎科学として」を開催した。

3) 他学会等関係

- ・第35回環境工学連合講演会「グリーンリカバリーと環境工学」（5/30、東京都、オンライン併用）を共催し、本学会の草佳那子会員（農研機構 中日本農業研究センター）が「持続的な食料生産システム構築に向けた土壌肥料分野の取り組み」を講演した。
- ・第33回環境工学総合シンポジウム（7/25、松江市）を協賛した。
- ・第60回アイソトープ・放射線研究発表会（7/5~7、東京都）を協賛した。
- ・第10回酸性雨国際会議（4/17~21、新潟市）を共催した。
- ・日本粘土学会第66回粘土科学討論会（9/12~13、仙台市）を協賛した。
- ・地盤技術フォーラム2023（9/6~7、東京都）を協賛した。
- ・土壌物理学大会第65回シンポジウム「農業が直面する環境汚染」（10/21、川崎市）を協賛した。
- ・日本腐植物質学会第39回講演会（11/11、東京都）を協賛した。

- ・第二回プラズマ種子科学研究会（2024.1/6～7、名古屋市）を後援した。
- ・農研機構「土壌の健康」に関するオンライン国際ワークショップ（2024.1/30～31）を後援した。

4) IUSS、ESAFS 等関係

- ・ESAFSサポートオフィスを通じ、第16回ESAFS（2024.3/26～29、タイグエン市）の開催などの関連情報を発信した。
- ・IUSS第2部門が開催する第9回土壌鉱物・有機物・微生物の相互作用に関する国際シンポジウム（ISMOM2024：2024.10/15～18、つくば市）の共催に際し、組織委員会（代表：和穎朗太会員）からの申請を受けて経費支援を行った。
- ・日本ペドロロジー学会と共催する第7回国際土壌分類会議（7th ISCC：2024.6/3～9、北海道）の事前調査経費の一部を支援した。

5) 定期刊行物の寄贈・交換

内外の研究機関に対して定期刊行物を寄贈・交換している。

- ・日本土壌肥料学雑誌 国内 9、国外 11
- ・Soil Science and Plant Nutrition 国内 5、国外 14

5. 本学会の委員会等活動

1) 企画委員会

- ・「企画委員会 2024 年度総会後に開催する「土と肥料」の講演会を企画した。

2) 財政基盤整備委員会

- ・拡大財政基盤整備委員会を開催し、財政基盤について検討した（10/18 オンライン）。委員会では、①財政基盤の現状とあり方、②学生会員の会費値下げ、③支出低減について議論し、それに基づいて、①会員数の減少幅を小さくするためにも学会の活性化を図る方策を講じること、②将来に向けて若手の裾野を広げて活性化につなげる取組みとしてまず学生会員の会費を 2,000 円に値下げすることを理事会へ提案した。

3) 土壌教育委員会

- ・土壌教育委員会を開催し（6/24 オンライン、9/14 対面、11/20～30 メール審議）、昨年度の事業報告および 2023 年度の事業と予算の確認、愛媛大会における「高校生による研究発表会」の準備状況の確認、動画作成をはじめとする土壌教育教材の開発、土壌教育の国際ガイドライン、次期学習指導要領改訂に向けた要望書の作成、を検討した。また、随時土壌教育委員会 HP の更新等を行った。
- ・愛媛大会において「高校生による研究発表会」を大会 1 日目（9/12）に開催（10 校 12 題）した。また LINC Biz を利用したオンラインポスター発表 18 題（10 校）を行った。
- ・委員による教育活動：体験教室「泥染めに挑戦」（4/22、寄居町）、「土の足ざわりを楽しもう」（5/3～4、寄居町）、「泥だんごづくり」（5/20、寄居町）、「土の特徴を調べよう」（7/16、寄居町）、「みみずのうんちストラップづくり」（7/23、寄居町）、「土の中の生きものを観察しよう」（9/23、寄居町）、「土の断面に洪水の痕跡を見る」（10/15、寄居町）、「クマムシを探して観察しよう」（11/18、寄居町）、「土でアート作品づくり」（12/2、寄居町）、出前授業（11/7）、土壌モノリス展示（5/3～8、11/14～12/28、寄居町）、「土ってすごいネ」（8/26、真岡市）、講習会講師「ナラ枯れから考える環境教育」（5/20、狭山市）、JICA「持続的農業生産のための土壌診断と土壌改良技術」（6/6～8、29、7/6～7、帯広市）、「千曲川ワインアカデミー」（6/22、東御市）、「河川植物と土壌」（7/27、狭山市）、「米作り体験」（9/27、宇都宮市）を行い、それらの概要は「土壌教育活動だより」として会誌に掲載した。

4) 広報対応

- ・会誌の会告およびニュース、学会 HP、FB、メーリングリスト (ML) によって、学会の活動概要、各種募集情報、シンポジウム等イベント情報、年次大会・支部会開催情報等を発信した。
- ・学会公式 SNS に X (旧 Twitter) を加え、情報発信を強化した。
- ・学会 HP の構成を検討し、トップページのバナーを拡充した。
- ・エコプロ 2023 (12/6~8、東京都) にブースを出展した。
- ・学会創立 100 周年ロゴマークを選定し、学会 HP、会誌・欧文誌の表紙、学会封筒に掲載し広報に利用した。

5) 国際土壌の 10 年関連活動

- ・IUSS、ESAFS を中心に委員等の推薦、国際会議等に係る情報収集と発信を継続した。
- ・2024 年の IUSS100 周年まであと 1 年の案内と動画を学会 HP と FB に掲載した。
- ・IUSS100 周年に向けて、愛媛大会期間中に学術会議 IUSS 分科会委員、IUSS 役員、日本開催国際学会開催主宰者、渉外担当理事 (国際) の情報および意見交換会を開催した (9/12)。

6) 男女共同参画学協会連絡会への対応

- ・女子中高生夏の学校 2023 (8/5~7、嵐山町) に参加し、2 日目に「生命と環境を支える「土壌」とは？」のタイトルで土壌モノリスとポスターの展示を行った。

6. 会務報告

1) 会員の動向

(1) 2023 年 2 月末日における会員数は次のとおりである。

正会員 1,593 名 (うち会費免除正会員 71 名、外国正会員 16 名)、賛助会員 37 社、名誉会員 10 名、学生会員 394 名 (うち留学生 78 名)、国内団体購読会員 79 団体
合計 2,113 名・団体

(2) 2023 年 2 月末日までの入退会者数 (種別変更を含む) は次のとおりである。

入会: 正会員 108 名 (うち会費免除会員 6 名、外国正会員 4 名)、学生会員 160 名 (うち留学生 22 名)、賛助会員 1 社、団体会員 1 団体
合計 270 名・団体

退会: 正会員 88 名 (うち会費免除会員 4 名、外国正会員 2 名)、学生会員 84 名 (うち留学生 11 名)、国内団体購読会員 4 団体
合計 176 名・団体

2) 会議

(1) 総会: 2023 年 5 月 20 日、東京大学山上会館において第 46 回通常総会が開催された。本会議においては、①2022 年度事業報告、事業報告の附属明細書、収支決算報告および監査報告、②2023 年度事業計画及び収支予算案、③役員の新任・退任、④総会議事録署名人の選任について審議され、各議案とも、原案通り承認された。その議事録を会誌 94 巻第 4 号に掲載した。

(2) 理事会: 学会事務所、東京大学山上会館またはオンラインにおいて計 7 回 (3/25、5/20、6/24、8/5、10/28、12/16、2024.1/20) 開催され、所要の事項・会務等を報告・審議した。その議事録は会誌ニュース欄に掲載した。主な事項として、①会誌および欧文誌の投稿・編集・刊行状況、②中間および期末監査報告、③総会議案、④学会創立 100 周年事業および若手支援の寄付募集、⑤年次大会対応 (2023 年度愛媛大会における理事会の役割分担、大会収支決算等、2024 年度福岡大会準備の支援、2025 年度開催地等の決定)、⑥学会創立 100

周年事業対応（ロゴマーク選定、テーマ別シンポジウム応募企画対応、支部シンポジウム動画の限定公開、会誌への名誉会員寄稿企画など）、⑦国際対応（IUSS 会議代表者派遣等、日本開催国際会議の支援など）、⑧他学会・他機関からの共催・協賛・後援要請案件、⑨入退会・休会・会費免除、⑩若手会員の海外渡航等支援、⑪会誌、欧文誌編集委員、土壤教育委員、部門長の交代、⑫学会賞等の英名、⑬学会賞等選考結果、⑭学生会員の会費改定、⑮学会公式 SNS (X) の運用、⑯学習指導要領改訂に向けた土壤教育に関する要望書、⑰インボイス制度および改正電子帳簿保存法対応などの審議を行った。

- (3) 部門長会議：①第 1 回部門長会議（3/20～23 メール会議）では、愛媛大会シンポジウム公募 5 課題の実施を承認し、若手対象の発表表彰の審査に係る審議を行った。また、第 35 回環境工学連合講演会のプログラムと草佳那子会員による講演課題が報告された。②第 2 回部門長会議（6/16 オンライン）では、愛媛大会プログラム編成を行い、若手対象の発表表彰の審査方法を確定した。③第 3 回部門長会議（11/6 オンライン）では 2024 年度福岡大会におけるシンポジウム公募案、若手発表表彰、第 9 部門における重複発表、土壤モノリス展示への対応を検討し承認した。また、第 36 回環境工学連合講演会講演者の推薦、次回進歩総説の発行計画、学会創立 100 周年事業における部門発シンポジウム、2024 年度予算要求等について審議した。
- (4) 2023 年度学会賞等選考委員会：学会事務所において会長を議長として開催し、2024（令和 6）年度日本農学賞候補者、第 69 回日本土壤肥料学会賞、第 29 回同技術賞、第 42 回同奨励賞、第 13 回同技術奨励賞の受賞者を選考した（10/27）。その結果は第 4 回理事会（10/28）での承認を経て、会誌 94 巻第 6 号に掲載した。また、同日午前、学会事務所において、論文賞等選考委員会を開催し、日本土壤肥料学雑誌論文賞受賞論文と SSPN Award 受賞論文を選考した。その結果も第 4 回理事会での承認を経て、会誌 94 巻第 5 号に掲載した。なお、学会賞等の応募書類の受付方法を、紙資料の郵送からオンライン提出に変更した。
- (5) 会誌関係：常任編集委員会（4/11 オンライン、3/15～22、4/29～6/16、7/27～8/4、9/22～29、12/1～8、2024.1/9～31 メール会議）、地域編集委員会（3/17～23、5/29～6/6、7/26～8/2、9/26～10/3、12/1～7、2024.1/26～2/1 メール会議）、拡大編集委員会（9/12 対面）で、原稿入稿状況の確認や遅れへの対応、学会創立 100 周年事業や高校生発表等の新たな企画への対応、委員会開催日程が協議された。報文・ノートの投稿数が少ないことから、投稿促進の工夫および総説・解説等の拡充を図った。
- (6) 欧文誌関係：第 2 回編集委員会（9/12、愛媛大学）および常任編集委員会（10/19、2024.1/11、3/14 オンライン）で論文の投稿・審査・出版状況および特集セクションの進捗状況、Format-free submission の導入可否などについて審議した。
- (7) 支部における会議：
- 北海道支部：支部評議員会（6/14、北海道大学農学部、札幌市および 11/24～30 メール会議）および支部総会（12/8、かでの 2・7、札幌市）を開催し、2022 年度会計監査報告、2023 年度事業報告、会計中間報告、2024 年度事業計画案、予算案、支部役員・評議員案、次期土壤教育委員会委員推薦案を承認した。また、野外巡検は事情により中止となった。
- 東北支部：支部役員会および支部総会（7/19、アイーナいわて県民情報交流センター、盛岡市）を開催し、2022 年度事業および会計監査報告、2023 年度支部役員、2023 年度事業計画および予算、2024 年度事業計画および予算案について承認した。2024・2025 年度の支部長および事務局担当は継続審議となり、臨時役員会（3/18～21 メール会議）および臨時支部総会（3/22～25 メール会議）において承認された。
- 関東支部：支部幹事会（11/16、17、20、21 オンライン）で 2024 年度以降の支部運営担当機

関および支部大会開催巡等を審議した。11月25日に支部幹事会・総会を東京農業大学（東京都）において開催し、2022年度事業報告、決算報告、会計監査報告、2023年度事業計画および予算、2024年度支部長・監事、2024年度事業計画および予算について承認した。

中部支部：支部評議員会（6/27 オンライン）、支部総会および支部評議員会（11/13、ホテルグリーンパーク津、津市）を開催し、2022年度事業報告、決算報告、会計監査報告、2023年度事業計画、予算案、2023・2024年度支部役員、評議員について承認した。また、土壤教育活動事業として土壤観察会（7/23）および岡崎北高校「理数探究基礎」環境科学講座（8/25）を愛知県豊田市自然観察の森において開催した。

関西支部：支部および関西土壤肥料協議会の合同役員会（12/8、神戸大学瀧川記念学術交流会館、神戸市）において2023年度事業計画案、収支予算案、2024年度事業計画、収支予算案を承認した。

九州支部：支部常議員会・総会を支部大会（12/14～15、九州大学西新プラザ、福岡市）に際して開催し2022年度事業報告、会計決算報告、2023年度事業計画案（補正）、予算案（補正）、2024年度事業計画案、年度予算案を承認した。

（8）支部長連絡会：支部・本部間、支部間の連携を深めるために2023年度愛媛大会3日目に対面開催した（9/14）。各支部の活動報告と計画および課題となる事項、支部における会計処理に関する留意事項、学会設立100周年事業における支部連携シンポジウムなどについて情報共有および意見交換を行った。

3) その他

本学会の目的達成のため、以下の取組を行った。

- ・若手会員の海外学会等の参加渡航費等支援者の選考を行い、前期2名、後期7名に渡航費の一部支援を行った。
- ・外部の顕彰へ候補者推薦を行い、増田曜子会員（東京大学大学院農学生命科学研究科）が2023年度（第22回）日本農学進歩賞を受賞した。また、波多野隆介元会長（北海道大学名誉教授）の2024（令和6）年度日本農学賞・読売農学賞受賞が決まった。
- ・学会創立100周年事業推進、若手会員支援の一助とするため、6月より寄付募集を開始した。2024年2月末までに2,389,000円（93件）の寄付があった。
- ・会員確保の一環として、賛助会員へ提供するサービスの拡充を図るため、愛媛大会への参加無料招待を行い、希望のあった14社（18名）を招待した。また、大会会場で賛助会員への謝意を掲示した。
- ・2023年10月1日からのインボイス制度に対応するための準備を進め、支部へのオンライン説明会（3/3）を開催した。
- ・2024年1月1日からの改正電子帳簿保存法の完全義務化に対応するため、規程を整備するとともに、2024年度年次大会運営委員会および支部の会計担当を対象にオンライン説明会を開催した（2024.1/19、2/22）。
- ・2025年度年次大会は、大竹憲邦氏（新潟大学）を大会運営委員長とし、新潟市において開催することを理事会において承認した。

II. 2023（令和5）年度事業報告の附属明細書

事業報告の附属明細書として記載すべき事項はない。